

# 設 立 10 周 年 祝 辞

——研究所の将来を展望しつつ——

水 谷 幸 正

戦後、大学になってからの40年の佛教大学の歩みをふりかえるとき、さまざまな見かたがあろうかと思うが、単純に区分けするならば、前半は拡充への準備期、後半は拡充期であったとみなすこともできる。将来へ向かっての発展を予測するならば、この40年は準備期そのものであると位置づけるべきかもしれないし、また、いちがいに拡充といってもその中身はさまざまであるが、本学の場合はどちらかといえば、量的拡大に比重がかかっており、内容の充実が遅れている、と言ってよいであろう。内容の充実こそ、いままでが準備期であったと言いたい。

内容の充実にも、これまた、さまざまあるが、教育条件の整備もさることながら、大学であるからには研究内容が優先されるべきである。この研究内容充実の一環として設置していったのが本学における各研究所である。研究所とはいえ、名ばかりで実が伴わないという批判もあるが、準備期だということで、先生がたのご理解を得てとりあえず発足していったのが実情であった。その一つが社会学研究所である。

いまはなき筆谷稔先生の熱意によって誕生した本研究所は山岡栄市先生から現在の斉藤政夫先生へと引き継がれ、所員の各先生の課題研究への情熱的な取り組みによって、施設の不備、僅少な予算という悪条件を克服して、かなりの成果を挙げていることに敬意を表するのによぶさかではない。

かつて『社会学部論叢』第21号で述べたように、社会学の領域は間口が際限なく広く奥行きもまたとてつもなく深いものである。言いかえれば、社会学はすべての学問に関与すると共に、すべての学問の成果を包摂するものである、とおもう。ことに、これから21世紀へ向かっての学問の趨勢は軽々に判断できないにしても、社会学の重要性がなすもの増大するであろうことは間違いない。本学において、新年度より応用社会学科を新設した所以もそこにある。両学科をバックアップする研究状況をつくり出すだけでなく、どの学科にも開かれた研究所になることは学問の内容からいって当然であろう。

学問に限らずどの分野においても言えることであるが、ことは一朝一夕で成るものではない。日常の孜々とした地道な研究の積み重ねが価値のある結果をおのずから招いてくれるのである。本研究所10年の業績はその積み重ねの一部であるにしても、斯学の発展に少なからず寄与していることを自負してもよいとおもう。

各研究所を統括して総合研究所にすべきである、という意見がかなり大きくなってきている。本研究所の20周年には、成人にふさわしい施設になっていることであろう。本内容もまた格段に充実することと確信している。

記念誌として、このたび第10号が発刊されることになった。編集委員代表の野村博先生はじめ関係各位に謝意を表して、粗略ながらお祝いの言葉にかえる次第である。